

<b>Title</b>	青年期の樹木画に関する研究(2)
<b>Author(s)</b>	山田, 麻有美
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 12(2): 217-232
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=542">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=542</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 青年期の樹木画に関する研究(2)

山 田 麻有美

## A Study of the Baumtest Used with Adolescents (Part 2)

Mayumi YAMADA

The purpose of this study is to verify validity for interpretation of the Baumtest using full descriptions of interpretation. Assessment is made using the Baumtest. Four tree drawings, which figure showed a same uniqueness, were picked out and analysed in detail. The results of this study were as follows:

- (a) Interpretations of the Baumtest reflected interpreter's subject on general procedures of interpretation.
- (b) Further researches would be needed to verify validity for interpretation of the Baumtest.

### 1. 問題と目的

筆者は、「青年期の樹木画についての一考察」(1997)、「学生理解の手がかりとしての樹木画についての研究」(1998a)、「青年期の樹木画についての研究」(1999)のなかで、学生理解の方法としての Baumtest の有効性を示してきた。現代の学生を理解するには、言語を用いない方法が必要であり、その点で、Baumtest が、学生が自らの内的状況を表現するのに、利用しやすい表現方法であることが、ある程度示されている。

ところで、一般的に、投映法心理検査の解釈は、複雑な手続きを必要としたり、長年の訓練を要求されたりする。そのため、学生理解に投映法が有用とされても、実際に利用することは、難しい。

一方、Koch, K.によると、樹木画の解釈には、解釈者の主観が重要とされる。Baumtest においては、まず、「根から吸収した水分や栄養を全体に循環させながら生きている限り成長しつづける」という樹木の生命作用によって、描画者の内的なものが賦活され、紙面に映し出される。次に、そこに描き出された樹木の絵を解釈者が解釈するのであるが、その解釈にあたって、Baumtest では、

---

**Key words;** Baumtest, validity, adolescence

描画者と同様に、樹木の生命作用によって解釈者の内的なものが賦活され、描かれた樹木画に解釈者の内的なものが呼応して、解釈がなされる、ということになる。つまり、Baumtestの解釈にあたっては、一般的に、心理テストの解釈の際には極力排除されるべき解釈者の主観こそが、重要とされるのである。

本研究では、この原理に沿って行う Baumtest の解釈過程を詳細に明示することによって、このような解釈方法の妥当性検討の端緒としたい。

## 2. 樹木画の収集と抽出

### 2-1 樹木画の収集

- ① 描画者：J短期大学2年生，心理学系科目受講生43名
- ② 実施時期：1998年4月

### 2-2 対象樹木画の抽出

収集された43枚の樹木画の中で、特定の形態（植物の発芽の状態，ないし双葉）を持って描かれているもの。

## 3. 樹木画の分析と解釈

### 3-1 樹木画の解釈者

- ① 樹木画の解釈者  
：筆者
- ② 解釈者の属性  
：Baumtestに関する経験は約20年（研究者として）  
性別は女性  
職業は大学教員

### 3-2 樹木画の分析と解釈

- ① T. S. の樹木画(a)の分析と解釈（図1.）

画面には、二つのものが描かれている。ひとつは、画面右側に描かれている「切り株」であり、もう一つは、その左側の少し離れたところに小さく描かれている「ふたば」である。このうちのどちらが主体であるとするかは、難しい問題である。

まず、描かれた「ふたば」と「切り株」の位置に着目すると、画面中央に描かれているのは、明

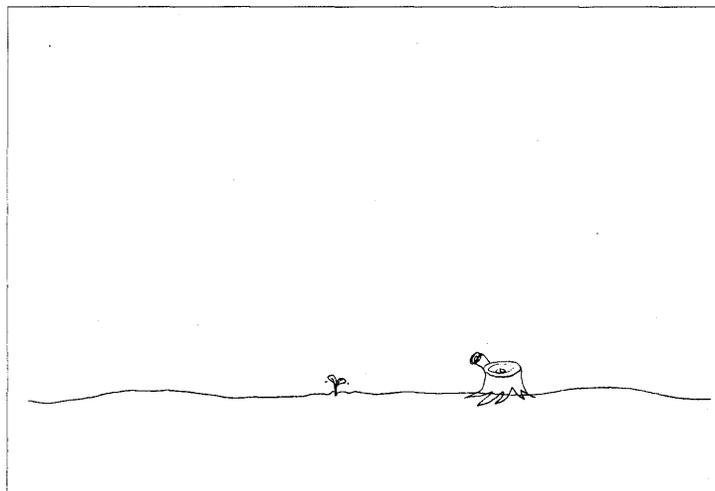


図1 樹木画(a)

らかに、「ふたば」である。形の大きさに着目すると、より大きく描かれているのは、「切り株」である。さらに地面をあらわす線に着目すると、「切り株」の根部分の上を、地面をあらわす横の線が横切って描かれている。それに対して、地面をあらわす線は、「ふたば」の細い幹（茎）をよけたように、その付近で不連続になっている。

これらのことから、描画者は、地面線を描く際、「切り株」にはあまり注意を払わずに描いたのに対し、「ふたば」には、明らかに、注意を払って描いたと考えられる。

さらに、「ふたば」は、左側の「切り株」と明らかなつながりは描かれていないものの、「切り株」の生命を受け継いだものと、描画者が捉えているとも考えられる。

上記の考察を踏まえ、ここでは「ふたば」を樹木画として分析の対象とし、「切り株」を付属物として捉えることとする。

#### 〈形態的特徴〉

紙面を横長に使っている。紙面の下から四分の一のところに地面をあらわす線が、左端から右端まで描かれている。この線は、中央の「ふたば」によって分断されている。

紙面中央の「ふたば」は、幅が1mm、長さは8mmほどの幹（茎）の上端から左右に一枚ずつ葉が出ている、という縦10mm×横8mmほどの極めて小さなものである。枝も根も描かれていない。幹は下端が開放となっている。

全体として、樹木あるいは若木になる前の状態を描いている。

描画者の視点は、「ふたば」を、やや上から見下ろす点にあると思われる。

その他のこの樹木画の特徴は、二枚の葉の横に描かれている小さな「点」または「線」である。

〈樹木の安定性〉

：細い幹（茎）に、それより大きな二枚の葉が、上端に描かれているため、「ふたば」自体は不安定である。しかし、それを支えるかのように、地面の線が左右に描かれているため、全体としては、比較的安定して見える。

また、右側に描かれている「切り株」の後ろ側から出ている切り落とされた枝は、「ふたば」に向かっている。このため、小さく、不安定で、存在感が希薄な「ふたば」の存在が強調されている。

〈描画線の性質〉

筆圧は、全体的には、中程度である。「ふたば」と、地面の線の「ふたば」に近い部分が、やや強くなっている。特に、「ふたば」の葉の部分と、「ふたば」付近の地面の線は、一つ一つは短いながら強く描かれている。また、「切り株」の輪郭がほぼ同じ筆圧で、一筆書きのように描かれている。「切り株」の切り口の年輪を描いた筆圧は、やや弱い。

鉛筆の使い方は、年輪を描いた線以外は、芯を立て描いているようである。

〈描画線の連続性〉

描画線は、連続している部分が大半である。

「ふたば」は、幹（茎）の線2本と、左右の葉を描いた線が2本、葉の中に描かれている葉脈がそれぞれ2本の、合計6本の線で構成されている。

「切り株」は、左側は、切り落とされた枝の左側と幹の左側が連続した1本の線で描かれているほか、枝の切断面と右側の部分が連続した線で描かれている。右側は、切り株の切断面から1本の線、また、根の部分は、屈折した連続の1本線で、切断面も、楕円の1本線、枝と幹の切断面に描かれている年輪も渦巻き状の1本線で、それぞれ描かれている。

地面をあらわす線のうち、「ふたば」の左側線は、紙面の左端に1mmほど、それに続いて右側に133mmほど、さらに「ふたば」の幹（茎）までの5mmほどの3本の線で描かれている。「ふたば」の右側線は、幹（茎）の右側から15mmほどと、続けて10mm、136mmの順の、3本の線で紙面右端まで描かれている。

合計18本の線である。

〈描画線の形状〉

この樹木画の描画線の特徴は、連続線である。この連続線は、直線ではない。緩やかな曲線や小さな波形を描いている。

〈空間12分割内の位置〉

地面の線は1, 2a, 2b, 3, 樹木(「ふたば」)は2a, 「切り株」は2bにそれぞれ描かれている。描かれている樹木(「ふたば」)はかなり小さく、12分割内2aの右上隅に位置する。

〈空間的広がりの特徴〉

紙面の左端から右端まで伸びている地面線を左右に分割する形で描かれている「ふたば」は、「退行」の領域に位置する。また「ふたば」の右側に描かれている「切り株」は、「退廃」の領域に位置する。

〈印象・解釈〉

地面から萌出たばかりの「ふたば」が、その萌出てきた生命の勢いを失わずに上に向かって伸びようとしているという印象の樹木画である。

この小さな「ふたば」は、丁寧に描かれていて、そのサイズに比して、その内容は必要かつ十分である。この小さな「ふたば」の中に、描画者の内的なものが投影されていると考えてよいだろう。

根の描写はないが、地面線の位置より少し下から幹(茎)が描き始められている上、幹(茎)の両側に分割されている地面線によって両側から支えられているような形になっているため、安定した印象を持つことができる。さらに付属物としての「切り株」に描かれている切り落とされた枝との連続性が感じられ、安定した印象が強められている。

この小さな「ふたば」の左右2枚の葉は、幹(茎)を描いている左右の線とそれぞれ連続的に描かれている。このことが、樹木画としての「ふたば」を小さいながらまとまったものにしていうのである。さらに、「ふたば」の左右に小さな点が2つずつ描かれているが、この点が「ふたば」の運動性を表現しているようである。この運動性が、この「ふたば」の伸びる勢いとなっている。

この樹木画(「ふたば」)は、非常に小さい。この小ささは、この描画者のこの時点での自分を示すものと考えられる。

青年期に位置するこの描画者は、他者との比較の中で自分を捉えることができるようになっている。同年代の他者との比較にとどまらず、男女を問わずさまざまな年齢の他者を知り、自分自身を客観的に捉えようとするとき、自分が本当に小さな存在であることに気がつく。しかし、この描画者は、社会の中の小さな自分を、その小ささのゆえに否定的に捉えるということとはしていない。社会の中の小さな存在であるがゆえに、支えられ、育てられる存在として、自分を位置付けている。「切り株」であろうと、地面線であろうと、自分に命を与え、見守り、支え、育ててくれるものとさえ捉えているように思われる。

上述の考察から、次のように解釈することができるだろう。

この樹木画(「ふたば」)の描画者は、常識的があり、情緒的に安定していて、対人関係は良好であろう。生きていくエネルギーは十分あるようだが、まだ、一人で生きていく勇氣はなく、誰かに

支えられる必要があると感じているようである。

② S. I. の樹木画(b)の分析と解釈

〈形態的特徴〉

発芽して間もない若木、ないし樹木の成長点、枝の先端などのように見える樹木画である。

幹(茎)は、幅1mmあまり、長さ5mmほど。その幹(茎)の先端左右に一枚ずつと、中央に一枚の計3枚の葉が描かれている。樹幹部といえる部分は形成されていない。

根は描かれていない。

樹木全体の大きさは、縦12mm、横20mmほどである。

樹木画の描かれている部分と、その周辺部は、縦30mm、横100mmの帯状の影(斜線)で覆われている。地平面は描かれていないが、この帯状の影で、それを表しているのかもしれない。

〈樹木の安定性〉

この樹木の形は、左右対称を意識していると思われるが、全体がやや右に傾いている。また、この傾きは、斜線で描かれている帯状の影によっても強調されている。さらに、幹(茎)の部分は葉

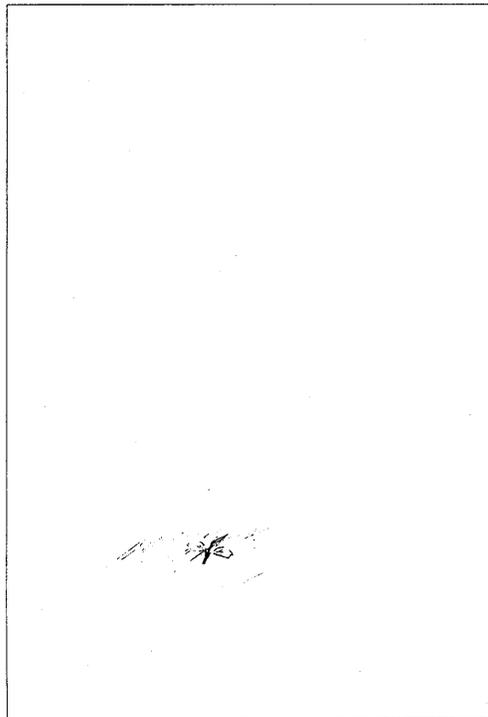


図2 樹木画(b)

の部分に比べ大きく広い面積に描かれているため、樹木（若木）自体はやや安定性に欠ける。

〈描画線の性質・連続性・形状などの特徴〉

この描画線の筆圧は、おおむね弱いが、樹木（若木）の幹（茎）の部分は、鉛筆を立てた細かい線を何度も重ねたように描かれている。葉の部分は、絵を描きなれたような線で、一気に描いているようである。帯状の影は、鉛筆を横にして描いている。

この樹木画の描画線は、ほとんどすべて、細く弱い筆圧で描かれたものであるが、一つ一つの線にためらいはなく、勢いが感じられる。

〈空間12分割内の位置〉

樹木（若木）は、2(a)の右寄りで2(b)との境界に近い位置に描かれている。すなわち、紙面のほぼ中心部分に位置している。

また、樹木（若木）を覆うように描かれている帯状の影は、左下の部分が1に、また、右側の一部が2(b)にそれぞれかかっている。つまり、樹木（若木）を覆う影は、左側の部分が右側のそれより大きいということである。

〈空間的広がりの特徴〉

この樹木（若木）は、紙面全体から見ると、非常に小さい。しかし、ほぼ中央付近で、上部へ向けて葉を伸ばしている。

〈印象・解釈〉

この樹木画の印象は、小さく、遠慮がちで、弱々しい。細く弱い筆圧で描かれている上に、その存在を覆い隠すように影が描かれているため、描かれている詳細を見るために、注意深さが要求される絵である。しかし、樹木（若木）を詳細に見ていくと、描きなれた、熟練の運筆が認められる。この小さな樹木（若木）には、無駄な線がない。弱く小さい線の集まりではあるが、一つ一つがこの樹木（若木）を表現するのになくしてはならないものである。特に左右二枚の葉を描いている線は、この描画者の描画力の高さを示している。

表面上の弱々しさの背後には、確かな技術を以って表現されている描画者の内的な豊かさが窺える。この内的豊かさは、この小さな、地中から萌え出したばかりの、枝先のような樹木（若木）のなかにこめられている将来への可能性ということもできよう。青年期という可能性に満ちた時期にいる描画者の、将来への期待を示すものと解釈することもできる。

一方、描画力の高さを覆い隠すように描かれている影は、真実の自分の姿を隠そうとする描画者の意思を示すものと考えられる。描画者は、自分自身への評価が定まっていないう、自分に自信が

持てないのであろう。そのことが、高い描画力をもって描かれた樹木(若木)を影で覆い尽くす表現となった、と考えることもできる。あるいは、自己の内部での自分に対する評価は高いが、自分が受けてきた社会的評価が、自分自身に与えている評価に比べて低いことを知っているために、アンビヴァレントな感情が Baumtest によって賦活され、このような表現となった、とも考えられる。

樹木(若木)の根は描かれておらず、幹(莖)の下端は上部に比べて細く描かれているため、樹木(若木)のみに着目すると、やや安定感にかけると言わざるを得ない。しかし、樹木(若木)全体が影に覆われているため、その安定感に欠ける印象は弱められている。本来この描画者は、心理的な安定性にやや欠けていて、それを外部(対人関係ないし社会)に反映させないように努力している、とみることができよう。

樹木画が描かれている四分劃上の位置は左下の領域であり、この領域の空間に象徴される意味は、「退行」とされる。まさに、この描画者は、本来の姿を隠し、退行しているのかもしれない。

上記のようなこの樹木画の印象から、次のような解釈ができるであろう。

この樹木画の描画者は、自分の能力や可能性にポジティブな評価を持っている。しかし、その評価はまだ自己内部にとどまっておき、他者の評価ないし社会的に得た客観的評価を内面化したものではない。あるいは、描画者は、客観的評価についての予測がついているために、主観的評価と客観的評価との差違に直面することを避けているのかもしれない。さらに言えば、この描画者は、やや現実感が乏しいか、対人的に緊張しやすいのかもしれない。

また、心理的な状態は、普段は表れることのない隠された自信や秘められた自尊心、また対外的ないし対人的に本来の自分の姿を隠そうとする行動様式といった葛藤状態が予想される。

### ③ M. T. の樹木画(c)の分析と解釈

#### 〈形態的特徴〉

この洋弓に似たかたちの樹木画(若木)は、紙面の中央に描かれており、地平面の描写がないため、中に浮いたように描かれている。

幹(莖)は、幅2から4mm、長さ69mmと細長い。幹(莖)の先端から左右に一枚ずつ計2枚の葉が出ている。幹(莖)の上端は右側の葉によって、また下端は根によって、それぞれ閉じられている。

比較的大きい葉は、2枚とも下に向かって伸びている。左の葉は、長さが35mm、最大幅は10mm。右の葉は、長さが30mm、幅は8mm。葉の形は、変形した楕円の先端が尖ったように描かれている。また、左右の葉の先端の距離は、58mmとなっている。

根は、短い線を重ねて描いたやや太いものと、一本線で描かれた細いものとの二種類がある。しかし、葉の大きさに比べ、小さい。根の長さは4~12mm、太さは1から0.5mmほどで、幹(莖)

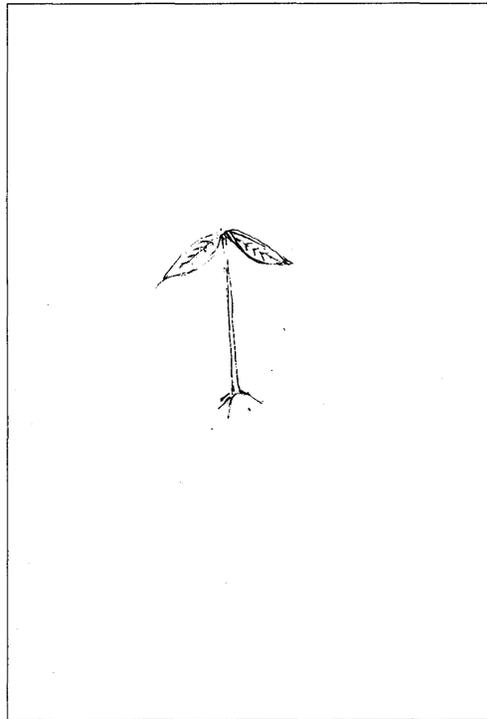


図3 樹木画(c)

の下端からの距離は最大で9mm、根と根の間の距離は最大で19mmとなっている。

また、紙面には、いったん描いた線を消しゴムで消した跡が残っているが、その痕はすべて、現在の樹木画の付近に集中している。

線を消した後の消し残し、あるいは、描画線の重なりと見られる部分はあるが、影として意図的に描かれた部分は、見当たらない。

#### 〈樹木の安定性〉

左右を対称的に描こうとしているようであるが、対称軸はやや左に傾いている。また、葉の形や大きさは、対称にはなっていない。

一方、上述のように大きな二枚の葉と小さな根、細長い幹（茎）などが特徴のこの樹木画は、地平面が描かれていないこともあって、安定的ではない。

#### 〈描画線の性質〉

描画線は、さまざまである。詳細に見ると、比較的筆圧の強い線と、比較的長い線、振えている線、短い線を重ねている線、不連続な線といったように、多様である。

## 青年期の樹木画に関する研究(2)

鉛筆の使い方は、字を書くときのような、鉛筆を立てた描き方である。

左の葉は、比較的長いまっすぐな線を重ね合わせるにより、太い線を得ている。それに対して、右の葉は、左の葉と同様の比較的長いまっすぐな線もあるが、振えた比較的長い線や、短い線が重ね合わされている。

幹(茎)の線は比較的長いですが、所々波打ったり、短い線を重ねたりして描いている。そのため、幹(茎)の太さは一定ではなくなっている。

### 〈空間12分割内の位置〉

左の葉と、幹(茎)、根の左の部分は、5aに描かれている。右の葉と根の右の部分は、5bに描かれている。

### 〈空間的広がりの特徴〉

中央左寄りに描かれている。

根と、幹(茎)の下部1/3とは、「退行」を象徴している左下の領域に、幹(茎)の上部1/3と、左の葉と右の葉の約1/2は、「傍観」を象徴している左上の領域に、また、右の葉の1/2は、「対決」を象徴している右上の領域に、というように小さい樹木(若木)でありながら、領域にまたがって位置している。

### 〈印象・解釈〉

下向きに伸びた2枚の葉と、その葉の大きさに比して細長い幹(茎)が、まず目を引く。2枚の葉は大きく、しかも下向きであるため、本来の樹木のもつ成長の力が、何かしら上からの圧力を受け、それに耐えている様子を描いているようにも見える。あるいは、浮遊しつつ上昇している様子を描いているとも見える。しかしそのどちらにしても、その葉を支える幹(茎)は、細いがまっすぐに伸びていて、たわむこともなく、上下左右どこからも圧力を受けているようには見えない。さらに根も下方に伸びていて、上からの圧力を支えているようには描かれていない。この葉と、幹(茎)および根との不整合が、この樹木画の印象を全般的に奇妙なものにしている。

さらに、根は描かれているのだが、根を張るべき地面が描かれていない。樹木画全体が中空に浮かんでいるように見える。この浮遊感は、この描画者の対人関係の希薄さ、または集団への帰属意識の低さを表現していると言えるだろう。

この描画者は、葉の描写に拘っている。2枚の葉は、それぞれ数回描き直された上、最終的に描かれた葉の輪郭は、何本もの線を重ね合わせて描いている。輪郭の内部に描かれている葉脈も、同じ線の上を何度もなぞっている。この線を重ね合わせたり、描き足したりする描写は、根の部分にも見られる。これらの描画方法に見られる固執的傾向は、描画者の持つ不全感を表していると考え

られる。

葉と根に対する固執的描画方法に比べ、幹(莖)は単純に描かれている。幹(莖)は「付け足し」の扱である。あるいは、葉と根を描くために仕方がなく描き入れたのかもしれない。どちらにしても、描画者の意識が幹(莖)にはあまり向けられていなかったことの現れであろう。

一般に、幹(莖)は、葉を支えるものであり、また、葉に水分を供給し葉で作られる栄養を根に運ぶ、という葉と根にとって双方を結び合わせる働きを持っている部分である。その幹(莖)に対して注意が払われていないことは、描画者の意識が、樹木(若木)全体に向けられてはいないことを示す。すなわち、描画者は、樹木(若木)が根と幹(莖)と枝・葉の三つの部分から成り立っている、と捉えていて、樹木(若木)を根と幹(莖)と枝・葉のある全体的な存在としては捉えていないということになる。

このことは、樹木に投影される描画者自身を、全体として捉えていないということを意味する。この描画者は、日常の、生きて活動している自分自身を部分として捉えている、ということになる。部分として自分を捉えるとき、ひとつの部分が他の部分と相容れないものであったり、まったく無関連であったりする、という事態が発生することは予測される。しかし、この描画者は、このことにまだ気づいていないのであろう。

上述の考察から、次のような解釈が可能であろう。

第一に、この描画者は、対人的に孤立する傾向にあるだろう。感情の交流のある親密な友人関係は、形成されていないことが予想される。日常的な活動をともにするだけの友人も多くはないだろう。たしかに、青年期にある描画者が、対人的に孤立することは、決して不自然なことではない。しかし、描画者が自分自身の興味関心にのみ注意を払い、自分自身の位置づけを見失うとき、対人的な孤立が、孤独感や不全感、根拠のない優越感・劣等感となるだろう。

第二に、描画者は自分の行動に自信を持ってないことが、しばしばあるだろうと思われる。それは、樹木(若木)のアウトラインを決定する際の描き直しやなぞり描きに現れていると考える。描き直しやなぞり描きは、青年期以降の描画にしばしば現れる。このような描画の仕方は一般に、「自信のなさ」や「優柔不断」、「決断力の欠如」などの解釈がなされることが多いが、「慎重さ」や「思慮深さ」、「気配り」など対人的な配慮のできるいわゆる「大人らしさ」と見ることのできる樹木画もある。しかし、この樹木画に関しては、「自信のなさ」と解釈するのが妥当と考える。

第三に、描画者は、「自分は何者か」という根源的な自分に対する問いを、保留または回避しているかもしれない、と考える。「自分は何者か」という問いは、他者との関係の中で生じるものである。自分を他者との対比の中で、客体としての自分を捉えようとするときに発生する問いである。他者を意識に上らせることなく、自分自身を捉えることはできないのである。

さて、一般的な多くの樹木画は樹木のみが描かれているのである。がしかし、そのほとんどは、紙面を枠組みとして描かれていることが了解されるような形状・サイズで描かれている。この樹木

## 青年期の樹木画に関する研究(2)

画からは、紙面を枠組みとして描いていると了解するための手がかりはない。しかるに、この描画者は、この樹木(若木)を描くのに、地面線や地平線、道を含む風景、その他付属物などの、樹木(若木)を客観的に捉えるための枠組みを何も描いてはいない。樹木(若木)はこの樹木(若木)だけで存在しているのである。すなわち、樹木(若木)を客観的な存在としては描いていない、ということである。

それゆえ、上に述べたように、この描画者は、自分を客観的な存在として捉えようとしてはいないのだろう、と推測するのである。

浮遊しながら上昇しているこの樹木(若木)は、糸の切れた凧あるいは手から離れてしまった風船のような、どこにも所属しない、自由さを持っているのかもしれない。

### ④ A. N. の樹木画(d)の分析と解釈

#### 〈形態的特徴〉

この描かれている樹木(若木)は、長さ13mm、太さ1から4mmの幹(茎)の上端左右に2枚の「ふたば」のみの画である。幹(茎)は、尖塔様の形状である。

2枚の葉「ふたば」は、幹(茎)の上部に継ぎ足したように描かれている。幹(茎)の上部と

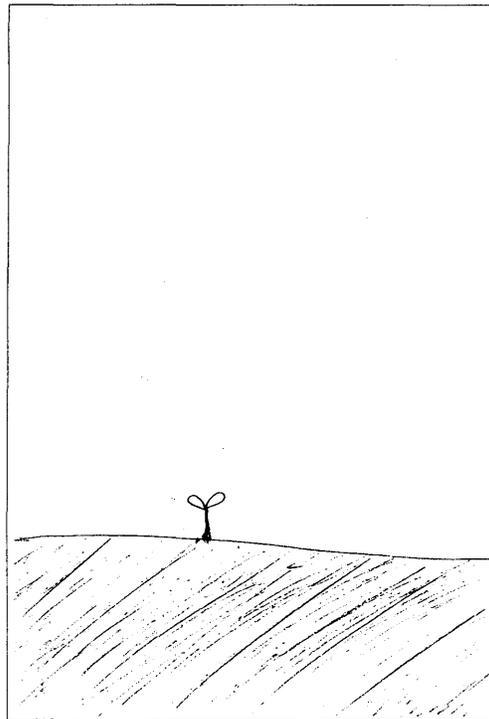


図4 樹木画(d)

「ふたば」のつなぎ目は、結節状である。

根は描かれていないが、幹(茎)の下部1mmくらいのところを、地面線が横断している。

「ふたば」の右の葉は、左に比べやや大きい。

全体の大きさは、およそ上下20mm、左右15mmである。

樹木全体は、真横から見る視点から描かれている。

この樹木画の中で、もっとも大きく描かれているのは地面である。縦長の紙面の下約1/4を区切って、左下から右上へ向かう斜線でほぼ塗りつぶされている。樹木の描画線よりも多くの線を用いて地面が描かれている。

#### 〈樹木の安定性〉

この「ふたば」の上下左右の比率は安定的であるが、幹(茎)の上端部で、左右2枚の葉の付け根となっている部分が、継ぎ足されたように描かれているため、やや不安定な印象を与える。

さらに、「ふたば」に比して大きな部分を占める地面との接点が不明瞭であり、安定感を欠く。

#### 〈描画線の性質〉

全体として、筆圧は、強い部分と弱い部分が混在している。

幹(茎)の部分は、ほとんどやや弱い筆圧の線が重ねられており、中心部分に1本細くやや強い筆圧の線があるが、目立たない。

2つの部分からなる地面線のうち1本は、紙面左から13mmほどのところから始まる細くて鋭い線が右に伸びるにつれ筆圧を減じていくが、途切れることのない長い線である。もう1本は、紙面左端の短い地面線は、弱い筆圧の線を2本重ねて描いている。

地面を描いている線は、斜線である。鉛筆を横に寝かせた形で描いているものと、立てた形で描いているものが混在している。この描画線の太さや、長さ、筆圧の強さなどは、一定していない。

#### 〈描画線の連続性〉

2枚の葉のアウトラインは、一筆書きの連続した線であるのに対し、幹(茎)は、細い幅の中をほぼ同じ長さの線を重ねて描いているため、アウトラインと認められる線を判別することができない。地面を塗りつぶす線は、連続した折返し線で描かれており、リズムの感じられる線の描き方である。線である。

#### 〈空間12分割内の位置〉

「ふたば」は、2a上部に位置する。

地面は、1, 2a, 2b, 3下3/4に描かれている。

#### 〈空間的広がりの特徴〉

この樹木画（「ふたば」）は、縦長の紙面の下、1/3の部分に描かれていて、上部は、まったくの白紙である。この上部の空間は、下部の塗りつぶされた地面と対比的である。精神性の部分の空白と、物質性の部分の充実との対比である。

樹木画（「ふたば」）の葉の描き方には、右上への方向性がやや認められる。

地面を塗りつぶす線には、明らかな右上への方向性が見られる。ただし、この方向性は、描画線の折り返しによって左下への方向性を常に伴っており、さらに地面線によってさえぎられ、上方領域への伸展は見られない。

樹木画（「ふたば」）は、「退行」の領域に位置する。

#### 〈印象・解釈〉

この樹木画全体の中で最も印象的なのは、上部と下部との対峙である。紙面の大半を占める上部の空白と、下部の塗りつぶされている地面との対峙である。空白は、空っぽであり、宇宙空間や、空、天などを示すものでもある。地面は、密度の濃い、硬い、詰まった部分であり、まさにその天に対するものである。この空白の部分と塗りつぶされた部分とは、対立的であり、ある種の隔絶された印象や緊張感を樹木画全体に与えている。この緊張感は、地面線によって強調されている。この樹木画から受ける印象は、硬い殻の中の空っぽさである。

樹木は、本来、密度が高く、硬い、詰まった土の中から、地と天の境界である地面線を破って、天に向かって伸びて行くものである。対立の仲立ちとなり、その対立関係を和らげる存在である。

この樹木画（「ふたば」）は、上述のように強調された天と地という対立関係の中に描かれている。「ふたば」は、この緊張を破って現れる、新しい存在であるはずなのである。しかるに、ここに描かれている「ふたば」は、幹（茎）の下部を地面線で分断されている。

さらに、思い切りよく強い一筆書きのタッチで描かれた左右2枚の葉と、筆圧の弱いせんを何度も重ね合わせて描かれている幹（茎）とは、対称的である。この異なった印象の2つの部分が、幹（茎）の上端部分、2枚の葉の付け根部分で継ぎ足すように描かれ、1本の樹木（「ふたば」）を構成している。

この葉と幹（茎）の結節部分の意味は、空白の部分と地面の部分の境界である地面線のそれと類似している。区切られることで明確にされた天と地の違いと同じく、結節部分によって意識化された、葉と茎が一体でありながら異なるものであることを強く意識させるのが、この結節部分である。

上述の考察から、次のようにこの樹木画（「ふたば」）を解釈することができるであろう。

はじめに考えられることは、この描画者が、自己の内部ある対立的なものを明確に意識している、ということである。その対立の内容については明らかではないが、その対立に意識が向いている、と思われるのである。形態的には、地面線や、結節部分、樹木や地面の各部で異なる運筆などから、

内的な対立は、意識されているものと意識されていないものが混在していると推測される。

この内的対立が、描画者の不安を引き起こし、外界との境界を強く意識させ、境界線を鮮明にするように働いていると捉えることができよう。日常生活の上では、表面的にはよく適応していることが予想される。しかし、内的な不安あるいは対立があるため、対人的に信頼関係を結ぶことが難しい、すなわち、具体的には、継続的で信頼に基づいた友人関係を持ちにくい状態であることが推測される。

地面は描かれているにもかかわらず、根は描かれいないし、地面線は幹(茎)を分割している。さらに、地面を塗りつぶす線は、方向のみが一定で、長さや筆圧、運筆の方向などは、一様とはいえない。これは、描画者が何らかの葛藤状態にあることを示すのかもしれない。あるいはまた、描画者の内の一貫性が欠けている状態、ないし自己をコントロールしていない状態を示すものとも言えよう。

「実のなる木を一本……」という教示に対して、「ふたば」を描いていることから、自分自身に対する何らかの可能性を意識していると考えられる。しかしその可能性の内容は不明瞭な上、根無し草的な不安を併せ持っているため、外界との境界を明確にせざるを得ないのかもしれない。

発達的には青年期に位置するこの描画者は、対峙する大きな存在の挟間に孤立的に存在する「ふたば」に象徴されるような、未整理の葛藤状態の中であって孤独感を持っていると考えられる。そのため、心理的には、そこを過ぎてきたものには安定的に見える過去へ戻ろうとする、あるいは、手近にある物質的なものへ逃げ込もうとする、といった短絡的な行動をとりやすいだろう。どちらにしても、この描画者が青年期という心理的「トンネル」の中にいる、ということであろう。

#### 4. ま と め

Baumtest の解釈過程を詳細に提示することを目的として、解釈者の主観を重視して、4枚の樹木画の分析を行った。

本研究で解釈の対象とした樹木画の形態的特徴は、「ふたば」である。「実のなる木を一本……」という教示に対して描かれた「ふたば」という形態の樹木画は、あまり多いものではない。「ふたば」は、もともと小さな物であるため、描かれるものも小さくなる。そのため、解釈の手がかりとなるものが少なく、解釈はしにくい。

それにもかかわらず、あえて解釈の対象として「ふたば」を取り上げたのは、解釈者の主観が入る余地が大きいと考えたからである。解釈者の主観が解釈の際に入り込むことを避けない解釈は心理検査として妥当かどうか、という点の検討が本研究の最終的課題だからである。

これまで筆者は、言語により自分の内的状況を表現することがしにくい現代青年の内的状況を理解するのに、言語を用いない Baumtest は、有効な方法であることを示してきた。たしかに樹木画

は、Koch の指摘したように、樹木の持つ生命力や、生きている限り成長しつづける樹木の成長の力が、人の内的なものの投映を促すようである。

樹木は、言語とは無関係に人の身近に存在している。人が樹木に働きかけることはあっても、樹木は主体的に人に働きかけることはしない。人が樹木と言語を媒介として交流することはないし、樹木に規定されたり制限を受けたりすることはない。つまり、樹木は人にとって言語的に中立なのである。このことが、投映という心的作用にとって重要なのである。言語（あるいは、言語を媒介にして人を規定したり制限したりする他者や社会）による影響を受けずに、投映という心的作用が行われるのである。

解釈を行った樹木画4枚の解釈のもとにあるものは、「青年期」という点である。これは、描画者に関する年齢情報を解釈者が持っているために発生したバイアスとも考えられるが、「ふたば」という形態のもつ暗示的な意味から発生したと考えるのが自然であろう。

このことはさらに、「可能性」や「エネルギー」に関連する解釈についても同様のことが考えられる。すなわち、「青年期」という上方を手がかりとするよりも、「ふたば」自体が持っている成長の力に描画者の内的なものが賦活され、その賦活されたものが描画者の解釈を引き出したと考えることができよう。

描画者の内的状況や対人的態度についての解釈は、ほぼ形態分析や動態分析、空間象徴などの Baumtest の解釈手法を用いて行われている。しかし、一般的な Baumtest 解釈に用いられるこの3つの指標をどのように適用かは、解釈者に任されており、解釈者の主観を無視することはできない。

#### 〈文 献〉

- (1) Koch K. (林勝造他訳) 1970 日本文化科学者 バウムテスト——樹木画による人格診断法
- (2) 林勝造, 一谷彊 (編著) 1993 バウム・テストの臨床的研究 日本文化科学社
- (3) Koch, R., 林勝造, 国吉政一, 一谷彊 (編著) 1980 バウムテストの事例解釈法 日本文化科学社
- (4) 高橋雅春・高橋依子 1986 樹木画テスト 文教書院
- (5) 津田浩一 1992 日本のバウムテスト 日本文化科学社
- (6) 上里一郎監修 1993 心理アセスメントハンドブック 西村書店
- (7) 日本描画テスト・描画療法学会編 1994 臨床描画研究IX特集バウムテスト 金剛出版
- (8) 山田麻有美 1997 青年期の樹木画についての一考察—Koch, C. のバウムテストを基にして 女子聖学院短期大学創立30周年記念論文集
- (9) 山田麻有美 1998a 学生理解の手がかりとしての樹木画についての研究 日本応用心理学会第65回大会発表論文集
- (10) 花沢成一ほか 1998 心理検査の理論と実際第IV版 駿河台出版社
- (11) 山田麻有美 1999 青年期の樹木画についての研究 聖学院大学論叢